

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：57102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420663

研究課題名(和文) 明和大津波で被災した琉球諸島の集落復興プロセスから見る環境再構築に関する研究

研究課題名(英文) A study on the environmental reconstruction view from Ryukyu Islands village reviving process that was affected by Meiwa massive tsunami.

研究代表者

鎌田 誠史(Kamata, Seishi)

有明工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：70512557

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：明和大津波(1771年)によって甚大な被害を受けた琉球諸島の集落や近世期に計画的に村立てされた集落を対象に、「土地の記憶(場所)」、「歴史の記憶(史料)」、「かたちの記憶(空間)」から集落空間の景観を復元して、復興における空間形成技術を考察した。明和大津波で被災し、再建した集落について、「土地整理事業」(1899～1902年)当時の土地台帳および地籍図の分析を行うことで、浸水被害の影響により、同地域においてどのような集落構造が生み出されているのかを検討した。また、明和大津波で被災し、再建した集落景観復元図を作成し、地形的立地条件に応じた空間形成技術と空間構成を考察した。

研究成果の概要(英文)：This study examines how the trace of natural disasters such as "Massive tsunami of Meiwa" in 1771 was recorded on the cadastral maps and cadasters produced by "The land arrangement enterprise" from around 1899 in Okinawa Prefecture which remain in Miyako and Yaeyama Islands especially. In addition, to restore the village of scenery from the storage and the form of the memory of the memory and history of the land, were studied.

研究分野：地域計画

キーワード：集落空間 明和大津波 集落景観復元 沖縄 近世村落 抱護 地籍図 土地台帳

1. 研究開始当初の背景

「明和大津波」とよばれる未曾有の自然災害は、明和8(1771)年に琉球諸島を襲来した。古文書の「球陽」によると、この津波による犠牲者は宮古諸島で2,548人、八重山諸島で9,393人に達したとされる。この地震・津波に関する記録としては、「球陽」、「大波之時各村之形行書(なりゆきしよ)」などがあり、牧野清の「八重山の明和大津波」では、古い記録の分析や被害状況の確認を行うとともに現存する地形・伝承・大石などから津波到達範囲を復元的に考察している。この先行研究は、地震・津波現象の啓蒙に役立つとともに、災害の防除に有効な手段を示唆していると言える。ただし、大津波によって被災した集落がどのように移動し、また再建したかについては明らかにされていない。多くの被災集落が一度別の場所に移動した後、旧来の場所に戻って再建していることから、本研究ではこれらの一連のプロセスを空間的に復元することで、集落復興における空間形成技術を考察し、集住環境の再構築の構造を明らかにすることが可能と考えた。加えて、このように再建を図った集落には、たとえば集落の防災林(フクギ)の配置などの震災・災害に対する備え「リスクリダクション(危険低減)」の叡智を有していると考えられる。

本研究メンバーは、これまで中国・台湾・韓国・沖縄など、東アジアの集落・居住空間について比較研究を進めてきた。その中で、現在失われつつある沖縄の集住環境について、その固有の文化を背景に形成された環境観や集落空間の重要性を認識するに至った。

「明和大津波」を経験した琉球諸島において、復興のプロセスを読み取ることは緊急課題であり、将来の地域再生や固有文化を生かした空間形成の根拠として重要であると考えられる。しかしながら、このような手法で集落の空間分析を行った研究蓄積は十分とは言えない。

これらを踏まえて本研究では、琉球諸島の被災した集落の復興プロセスの空間的な復元を試みて、現在までの研究蓄積を基に、沖縄の文化にみる集落の空間構成と被災集落の「環境再構築」の仕組みを明らかにする必要性を認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、明和大津波(1771年)によって甚大な被害を受けた琉球諸島の集落を対象に、「土地の記憶(場所)」、「歴史の記憶(史料)」、「かたちの記憶(空間)」から被災による集落移動および再建にいたる一連のプロセスを空間的に復元して、復興における空間形成技術を考察し、津波で大きな被害を受けた環境下でもなお持続し秩序づけられてきた空間の特性を被災集落の「環境再構築」の構造として明らかにすることを目的としている。

また、再建を果たした被災集落は震災や津

波に対する備え「リスクリダクション(危険低減)」の叡智があると仮説し、その仕組みを明らかにすることで、今後の被災地における居住環境再構築の実践に還元することを究極の目的とする。

3. 研究の方法

明和大津波(1771年)で被災した琉球諸島(八重山・宮古・奄美)の集落を対象に、「土地の記憶(場所)」、「歴史の記憶(史料)」、「かたちの記憶(空間)」に主眼を置き、被災による集落移動から再建にいたる一連のプロセスを空間的に復元して、復興における空間形成技術と空間構成の特徴を考察する。

本研究では、現地調査・聞き取り調査・文献調査を通じて研究課題を進めていく。その際、八重山エリア、宮古エリアを重点的に研究する。

4. 研究成果

明和大津波(1771年)によって甚大な被害を受けた琉球諸島の集落を対象に、「土地の記憶(場所)」、「歴史の記憶(史料)」、「かたちの記憶(空間)」から被災による集落移動および再建にいたる一連のプロセスを空間的に復元して、復興における空間形成技術を考察した。

その主な研究成果について以下にまとめる。

(1) 地籍図・米軍空中写真を活用した「明和の大津波」影響分析

1) 明和大津波の被害を受けた八重山の集落の空間構成

かつて明和大津波の被害を受けた、沖縄県石垣市の平得村・真栄里村、大濱村、宮良村、白保村の明治期の資料から村落空間の復元図を作成し、明治20~30年の村落空間の特徴と現在に至る空間的変遷を考察した。

まず、上記の4村落における明治期(20~30年)の村落空間の詳細な復元から、往事の村落空間の特徴を考察した。対象村落に共通して村落外縁部には樹林帯(村抱護)が分布し、その外側に墓地が分布していることから村抱護に囲まれた範囲が村域を示している可能性を指摘した。このような抱護は、海岸沿いに分布する浜抱護と村域を取り囲む村抱護が存在し、特に村抱護には帯状で幅の小さな形状の樹林帯が多く見られた。加えてこのような村抱護と聖域が結合(平得村、大濱村、宮良村、白保村)し、居住域とその周りの生産域を抱き囲むように分布するという共通した特徴を指摘した。本研究の復元図によって、抱護の詳細な形状が明らかとなった。

居住域の形状は井然型(ゴバン型)であるが、その道路構成に直線的または湾曲した構成の大きく2種類に分類され、特に真栄里村は平得村より明らかに直線的な道路構成となっている。これは真栄里村が1765年に平得村から分村した後に、1771年の明和の大津波で跡形もなく流されており、一度別の場

所で新村を建てた後、再び現在の平得村に接する場所に新設しているため真栄里村が直線的な道路構成となった可能性が考えられる。1771年の明和の大津波による村落の成立年代の違いが形態的な相違に関係している可能性を指摘した。

(2) 土地台帳・地籍図を活用した「明和の大津波」影響分析

「明和の大津波」被害の実態についての追究はこれまで、波によって陸地に打ち上げられた大石「津波石」の分布を見たり、当時の住民による記録を解析したりすることによって試みられてきた。

その中で、とくに宮古諸島などを中心に、同地域において比較的よく残されている「土地整理事業」(1899~1902年)当時の土地台帳および地籍図の分析を行った。そして、これらの資料において、「明和の大津波」の浸水地区と非浸水地区でどのような違いが描かれているのか、また、浸水被害の影響により、同地域においてどのような集落構造が生み出されているのかを検討した。

1) 近代地籍図・土地台帳とその活用

今回基礎資料とした地籍図・土地台帳は、1899(明治32)年~1902年にかけて現在の沖縄県一行われた「土地整理事業」に伴い、整備されたものである。沖縄県一行では第二次世界大戦における地上戦を経験した結果、多くの地域で地籍図・土地台帳が失われてしまっている。沖縄本島では、ごく一部の地域でしか土地整理事業時の地籍図は残されておらず、とくに土地台帳は確認できていない。こうした中で幸いにも、多良間島については、那覇地方法務局宮古支局において、手続きの上で土地整理事業時のほぼ全ての地籍図面の閲覧および写しの発給と、土地台帳の閲覧とが可能であった。また同島については、沖縄県立公文書館においても地籍図面の写しが残されていた。そこで多良間島のうち、その中心集落一帯の当初1,700筆(土地整理事業時)、後の分筆も含めるとのべ約2,300筆分について、地籍図面の写しを得ると共に、土地台帳記載についての記録を取ることができた。そして、地籍図面についてはデジタル処理を行うとともに、土地台帳についてはその記載を記録し、データベース化した。

2) 多良間島中心集落の街区構造

土地整理事業時の地籍図・土地台帳を活用し、1899(明治32)年頃の多良間島中心集落の構造を復元すると、とくに東側の塩川集落の宅地の範囲が現在よりも狭かったことが明らかになった。そして一見すると、しばしば沖縄県一行の計画的村落の特徴として指摘される、ほぼ直交した街路で構成された「井然型」の集落構造が浮かび上がった。ただし、整然と並ぶように映る街区は、とくに集落の外周において若干不定形となる。そこで、「明和の大津波」時の浸水域との重ね合

わせから検討を行うと、大部分が浸水を免れた仲筋集落側は街区の大部分が不定形で、かつ、定型に見える街区であってもそれぞれが複数×複数筆以上の地筆で構成されており、街区自体が大きいだけでなく、周囲の道路に接していない地筆、いわゆる「閑地」が街区の中央に見受けられた。それに対して、その範囲の大部分が浸水した塩川集落側では、1×4~5筆程度の宅地で構成された細長い街区が目立ち、「閑地」地筆は非常に少なかった。こうした仲筋集落と塩川集落にみられる街区構造の対比は、前者が古くからの集落、後者が新規集落であることに起因しており、塩川集落の構造は、「明和の大津波」以前となる村立て時にある程度できあがっていた可能性もある。しかしながら、こうした浸水域で顕著にみられる1×4~5筆程度で構成された街区は、日当たりと同時に通気性の良さを確保できるという一般的な利点のほか、津波などの急襲時に避難が容易となることなども期待され、受け入れられた可能性もある。

さらに、土地整理事業時の地籍図からは、この集落周囲の「抱護」林が、現在では並走する道路となってしまっている敷地を含めてかつては現在よりも若干厚く、16~20m程度の幅があったことが確認できた。このように多良間島の中心集落は、周囲からの自然災害の脅威に備えた様々な構造を持ち合わせていたと想定された。

3) 土地所有関係からみた集落構造

土地所有者記載についても検討すると、想定された関係がより裏付けられることとなる。すなわち、一見すると仲筋・塩川集落は、宅地の周囲を畑作地が取り囲み、その周囲を丘陵地および「抱護」林が取り囲んだその外側に畑作地が展開するという同心円的な構造に見えるものの、実際には何らかの要因による、不自然な土地所有関係がみられていた。字仲筋・塩川に居住する土地所有者の所有地は、それぞれの中での「小字」も超えた錯綜した土地所有関係をみせており、さらに、字塩川側居住の土地所有者が遠く離れた字仲筋側の土地を所有していた例も少なくない。

現在の「ムラ域」よりも東側から移住してきたとされる塩川集落を含めた居住者にも、丘陵地に畑作地を確保しておくべきという慣習が存在したことが想定される。そして、このように丘陵地に確保された土地は、「明和の大津波」後に塩川集落の人々が一時的に高台に避難していた名残かもしれないと同時に、再び津波被害が発生した際に備えた「高台移住」の場であった可能性を指摘した。

以上みてきたように、「明和の大津波」から120年余り経た土地整理事業時であっても、その被害と対策とを想定している可能性のある土地所有について検討した。

4) 今後の展望

これまで見てきたように、近代地籍図と土地台帳からは、「明和の大津波」をめぐる対応がかいま見ることが明らかになった。そ

れはまさに、現在「東日本大震災」をめぐって進展している被害地域の再開発や集落の高台移転といった動きを彷彿とさせる。また、「防風林」としての注目が先行しやすい「抱護」林も、その重要性が住民によって強く共有されてきたことに、何らかの自然災害の記憶が強くはたらいっているかもしれない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 22 件)

Bixia Chen, Yuei Nakama, & Takakazu Urayama, Planted forest and diverse cultures in ecological village planning: a case study in Tarama Island, Okinawa Prefecture, Japan. *Small Scale Forestry*, pp.1-16, 査読有, 2013

Nakama Yuei, John Michael Purves and Bixia Chen. Modern Japanese & English Translations and Content Analysis of 'The Scope of the Bureau of Forest Administration' from the 'Eight Volumes on Forest Administration.'. *The Science Bulletin of the Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus*, No.60.農学部学術報告, pp.1-12, 査読無, 2013

鈴木一馨、沖縄本島における村獅子の分布について、『宗教研究』87 巻別冊、日本宗教学会、pp.412-413、査読無、2014

山元貴継、沖縄の近代土地台帳・地籍図に見る「災害」の記憶と対策、情報知識学会誌 第 23 巻 2 号、pp.345-352、査読無、2013

Chen, B., Nakama, Y., and Urayama, T. Planted Forest and Diverse Cultures in Ecological Village Planning: A Case Study in Tarama Island, Okinawa Prefecture, Japan. *Small-Scale Forestry* 13(3), pp.333-347, 査読有, 2014

仲間勇栄、蔡温の山林観 風水地理を応用した植林技術と集落景観づくりー、山林(第 1562 号)大日本山林会、pp.2~10、2014

仲間勇栄・他 2 名、『林政八書』中の「杣山法式仕次」: その和訳・英訳と内容分析、琉球大学農学部学術報告(第 61 号) 琉球大学農学部、pp.11~22、査読無、2014

仲間勇栄・他 2 名、『林政八書』中の「就杣山惣計条條々」: その和訳・英訳と内容分析、琉球大学農学部学術報告(第 61 号) 琉球大学農学部、pp.23~28、査読無、2014

仲間勇栄・他 2 名、沖縄県におけるフクギの樹齢推定に関する調査研究、琉球大学農学部学術報告(第 61 号) 琉球大学農学部、pp. 29~40、査読無、2014

鎌田誠史・山元貴継・浦山隆一・渋谷鎮明、沖縄本島・旧勝連間切の近・現代における村落空間の特徴と変遷 - 村落空間構成の復元を通じて その 2 -、日本建築学会計画

系論文集, vol.79No.700, pp.1329-1335、査読有、2014

鎌田誠史、山元貴継、浦山隆一、渋谷鎮明、地形的立地条件から見た琉球列島における村落の空間構成に関する研究 - 近世期に発生した計画的村落の形態類型を通じて -、日本建築学会計画系論文集第 81 巻第 719 号、pp.11-21、査読有、2016

Chen, B., and Nakama, Y., Residents' Preference and Willingness to Conserve Homestead Woodlands: Coastal Villages in Okinawa Prefecture, Japan. *Urban Forestry & Urban Greening* 14(4):919-931、査読有、2016

前堂結・仲間勇栄・陳碧霞・来間玄次、多良間島における染料植物の民俗利用に関する調査研究、琉球大学農学部学術報告第 62 号、pp.1-14、査読無、2016

仲間勇栄・ジョン・マイケル・パーヴェス・陳碧霞、『林政八書』中の「山奉行所公事帳」: その和訳・英訳と内容分析、琉球大学農学部学術報告 第 62 号、pp.15-59、査読無、2016

仲間勇栄・ジョン・マイケル・パーヴェス・陳碧霞、御差図控、琉球大学農学部学術報告 第 62 号、pp. 61-75、査読無、2016

山元貴継、林: 集落や都市を縁取る空間、地理, 60 巻 10 号, pp. 32-39, 査読無、2015

鎌田誠史、間切番所が置かれた村落「主村」の空間 近世末期の村落景観の復元, 建設情報誌しまたてい, No.72, pp.4-8, 査読無、2015

山元貴継、多良間島に見る近世村落の成立・発展過程と「抱護」林、建設情報誌しまたてい, No.73, pp.4-8, 査読無、2015

山元貴継、沖縄島南部における「格子状集落」の立地と構造 ~ 地籍図から見た南城市玉城・前川集落 ~、建設情報誌しまたてい, No.74, pp.4-8, 査読無、2016

鈴木一馨、村獅子と村抱護、建設情報誌しまたてい, No.75, pp.4-8, 査読無、2016

²¹ 鎌田誠史、琉球列島における近世村落の村立て手法と空間構成、建設情報誌しまたてい, No.76, pp.4-10, 査読無、2016

²² 渋谷鎮明、朝鮮時代の地誌と古地図に見る「気」と「脈」による国土認識、地質学会懇話会報 (JAHIGEO Bulletin), no.45、pp.4-11、2015

[学会発表](計 35 件)

陳碧霞・仲間勇栄・浦山隆一、沖縄的村落空間(東アジアにおける風水集落の景観構造及び風水樹に関する比較研究)、国際シンポジウム「国際移民と客家文学術研究会」、2013.10.10、中国・嘉応大学客家研究院

大川泰毅・鎌田誠史・浦山隆一、与論島における城・朝戸集落の空間構成の特徴に関する研究、日本建築学会九州支部研究発表会、2014.3.2、佐賀大学

山元貴継、鎌田誠史、浦山隆一、澁谷鎮明、
沖縄本島南部における「格子状集落」の形
成 - 南城市玉城・前川集落などを事例に
-、日本地理学会春季学術大会、2014.3.28、
国土館大学

山元貴継、沖縄の近代土地台帳・地籍図に
見る「災害」の記憶と対策、情報知識学会
第21回年次大会、2013.5.25、お茶の水女
子大学

山元貴継、土地台帳・地籍図を活用した「明
和の大津波」影響分析、日本地理学会秋季
学術大会、2013.9.28、福島大学

澁谷鎮明、植民地朝鮮の地理思想の転換
山の認識を中心に、A P U セミナー
「東アジアにおける”聖なる山”の文化的
景観」(招待講演)、2014.1.10、立命館ア
ジア太平洋大学

SHIBUYA Shizuaki, “Hougo” Concept of
Feng Shui in Okinawa and Village Forest,
Asian Geomancy (Pungsu, Fengshui,
Husui): Towards an harmonized approach
for sustainable land management in Asia
2014 Workshop (招待講演)、2014.1.23、
Seoul University

Chen, B. and Nakama, Y. Planted Forest
and Diverse Cultures in Ecological
Village Planning: a Case Study in Tarama
Island, Okinawa Prefecture, Japan.
Asian Geomancy (Pungsu, Fengshui,
Husui), Toward a harmonized Approach for
Sustainable land Management in Asia),
Japan. 2014.1.24

仲間勇栄、沖縄の御嶽林をどうとらえる
か：植生・歴史・文化の視点から、公開シ
ンポジウム「琉球列島の自然・文化・環境
人文学と自然学の対話」琉球大学国
際沖縄研究所中期計画達成プロジェクト
(2013年度)(招待講演)2013.12.1、
沖縄県立博物館・美術館

仲間勇栄、沖縄の伝統集落景観と備瀬のフ
クギ屋敷林、備瀬区主催(招待講演)、
2014.2.17、備瀬公民館

Yuei Nakama, Coastal Forest
Manegement in Okinawa. APN Project
on Coastal Forest Management in the
Face of Global Change Based on Case
Studies in Japan, Myanmar and
Philippines, Inception Workshop:
“Coastal forest management in the face
of global change”.(国際学会) 15-17
September 2014、Nishihara(Okinawa),
Japan.

浦山隆一、場所に刻印された土地の記憶
集落と御嶽(ウタキ)、第二回学際シ
ンポジウム「生き続ける琉球の村落」、
2014.10.4、沖縄県立美術館・博物館

山元貴継、「格子状集落」の成立 - 琉球
村落のイメージへの再検討 -、第二回学際
シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、
2014.10.4、沖縄県立美術館・博物館

仲間勇栄、沖縄の御嶽林の形成とその植生
構造、第二回学際シンポジウム「生き続け
る琉球の村落」、2014.10.4、沖縄県立美
術館・博物館

鎌田誠史、生き続ける琉球の村落 村落計
画(村立て)の原理、第二回学際シ
ンポジウム「生き続ける琉球の村落」、2014.10.4、
沖縄県立美術館・博物館

齊木崇人、総括、第二回学際シンポジウム
「生き続ける琉球の村落」、2014.10.4、
沖縄県立美術館・博物館

仲間勇栄、琉球王朝時代における抱護の防
風林帯の意味を考える、「防風林の日」招
待講演、沖縄県主催、2014.11.6、沖縄市農
民研修センター

仲間勇栄、琉球王朝時代における抱護の防
風林帯の意味を考える - 石垣島・波照間島
を事例として、「防風林の日」招待講演 沖
縄県主催、2014.11.27、石垣市健康福祉セ
ンター

澁谷鎮明・山元貴継・浦山隆一・鈴木一馨、
韓国農村の「村の林」と裨補概念 全羅北
道馬耳山周辺地域を事例として、人文地
理学会、2014.11.1、広島大学

澁谷鎮明、Introduction to Feng-shui
Inspection Records in Pre-modern
Okinawa: In Case of
“Hokubokusan-Fusuiki(北木山風水記)”
The 2nd International Symposium on
Asian Geomancy Studies Towards
Harmony amongst Natural Environment
and Human Culture (Center for
Biodiversity and Cultural Diversity
Conservation, 2014.12.1, Yunnan, China

21 山元貴継・鎌田誠史・浦山隆一・澁谷鎮明、
沖縄島南部における「格子状集落」の立地
と構造 - 地籍図を活用した南城市玉城・前
川集落の検討 -、日本建築学会九州支部報
告、2015.3.1、熊本県立大学

22 鎌田誠史・浦山隆一・山元貴継・齊木崇人、
近世期に村立てされた格子状村落の空間
構成に関する研究 - 宮古島・伊良部島の村
落を事例として -、日本建築学会九州支部
報告、2015.3.1、熊本県立大学

23 山元貴継、地籍資料と「まちづくり」 -
沖縄県石垣市における「抱護」林をめぐっ
て -、日本地理学会秋季学術大会(地図・
絵図資料の歴史 GIS 研究グループ)、
2014.9.21、射水市新湊博物館

24 山元貴継、地籍図・土地台帳に描かれた沖
縄の村落 - その構造と変化をめぐって
-、沖縄県地域史協議会度第2回研修会
(招待講演)、沖縄県地域史協議会、
2014.10.30、石垣市

25 鎌田誠史、村抱護を有する近世村落の空間
構成と村立ての原理-石垣の村々を中心に-、
沖縄県地域史協議会度第2回研修会(招待
講演) 沖縄県地域史協議会、2014.10.30、
石垣市

26 URAYAMA Takakazu, Ecological Outlook on

- Environment and Space Formation Technology of Residence and Settlement : from Passive Design to Traditional Planted Forests “ Ho:go(抱護) ” 9th International Forum on Ecotechnology、20-23 December 2014 Hotel OACity Kyowa Miyako Island, Okinawa, Japan
- 27 鎌田誠史、琉球列島の近世村落における景観復元について、H-GIS 研究会、2016.2.20、熊本県立大学
- 28 仲間勇栄、おきなわ福木物語～福木は不思議な木～、沖縄海邦銀行主催 みどりの講演会(招聘講演)、2016.2.26、沖縄海邦銀行本店講堂
- 29 仲間勇栄、琉球王朝時代の風水配置とフクギ林の造成～多良間島を事例として～、沖縄県農林水産部糖業農産課主催「防風林の日」講演会(招聘講演)、2015.11.26、多良間村コミュニティセンター
- 30 仲間勇栄、森林景観と風水ランドスケープ～名護市真喜屋・稲峰を事例として～、沖縄県緑化推進委員会主催 緑化講演会(招聘講演)、2015.7.16、名護市真喜屋公民館
- 31 山元貴継・藤田裕嗣、地籍図・地籍帳をもとにした明治期における海岸村落の空間構造分析 - 福島県相馬市尾浜地区の事例 -、2015 年人文地理学会大会、2015.11.17、大阪大学
- 32 山元貴継、地籍資料と「まちづくり」 - 沖縄県石垣市における「抱護」林をめぐる -、あいち地籍研究会、20150714、愛知県土地家屋調査士会
- 33 渋谷鎮明、日本の風水研究の回顧と展望 異文化理解としての風水研究、人大韓地理学会大会、2015.12.15、ソウル K ホテル
- 34 渋谷鎮明、浦山隆一、山元貴継、鎌田誠史、Fengshui Inspection Record as Data for Restoration of Village Landscape in Okinawa: A case study on Sonai Village, Iriomote Is. The 3rd Asian Geomancy (Fengshui, Pungsu, Husui) Workshop、2016.2.25-29、Okinawa Prefectural Museum & Art Museum
- 35 大川泰毅・藤川昌樹・浦山隆一・鎌田誠史、与論島城・朝戸集落における居住空間の類型に関する研究-奄美群島の集落空間その1-、日本建築学会大会、2015.7.20、東海大学
- [図書](計8件)
 鎌田誠史、浦山隆一、齊木崇人・渋谷鎮明・仲間勇栄・高良倉吉・山元貴継・鈴木一馨、学際シンポジウム『生き続ける琉球の村落 固有文化にみる沖縄の環境観と空間形成技術』、富山国際大学現代社会学部、2013
 山元貴継、環東シナ海における『格子状集落』をめぐる一考察 - 薩摩/琉球などの比較を中心に -、『住まいと集落が語る風

- 土 - 日本・琉球・朝鮮 -、関西大学出版部、2014
 山元貴継、人文地理学事典、歴史的な事象を扱う人文地理学 近代植民地の都市と地域』、丸善出版、2013
 渋谷鎮明、人文地理学会編『人文地理学事典』、丸善出版、2013
 渋谷鎮明、宮本真二・野中健一編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第1巻 自然と人間の環境史』、海青社、2014
 仲間勇栄・来間玄次、おきなわ福木物語、沖縄県緑化推進委員会、2015
 山元貴継、『図説地理資料 世界の諸地域 NOW2016』、帝国書院、2016
 山元貴継、『新詳地理資料 COMPLETE 2016』、帝国書院、2016

[産業財産権]
 出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

[その他]
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌田 誠史(KAMATA SEISHI)
 有明工業高等専門学校・建築学科・准教授
 研究者番号: 70512557

(2) 研究分担者

浦山 隆一(URAYAMA TAKAKAZU)
 富山国際大学・現代社会学部・客員教授
 研究者番号: 10460338
 渋谷 鎮明(SHIBUYA SHIZUAKI)
 中部大学・国際関係学部・教授
 研究者番号: 60252748
 仲間 勇栄(NAKAMA YUEI)
 琉球大学・農学部・名誉教授
 研究者番号: 70142362
 山元 貴継(YAMAMOTO TAKATSUGU)
 中部大学・人文学部・准教授
 研究者番号: 90387639
 齊木 崇人(SAIKI TAKAHITO)
 神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
 研究者番号: 90195967

(3) 連携研究者

鈴木 一馨(SUZUKI IKKEI)
 財団法人東方研究会・研究員
 研究者番号: 50280657